



クラブ 会報

CLUB BULLETIN (WEEKLY)

鶴岡ロータリークラブ

TSURUOKA ROTARY CLUB
D-253

創立 S 34.6.9
承認 S 34.6.27

例会場	鶴岡市馬場町	物産館3階ホール
例会日	毎週火曜日	12:30~13:30
事務所	鶴岡市馬場町	商工会議所内
		電話 0235 (4) 7711
会長	嶺 岸 光 吉	
幹事	藤 佐 村 徳 衛	
会報委員長	川 小 池 海 正	
	西 佐 藤 一 昇	

No., 1099 1981. 3. 17 (火) (時々雪) No., 37

ヒンター紹介

早坂重雄君 生命保険一酒田東R.C
笹本森雄君 ホテル一鶴岡西R.C

◆ ゲスト紹介

交換学生 ジェームス君

会 長 報 告

嶺岸光吉君

野村敏行君の最後の例会出席クラブより記念品差し上げる。

幹 事 報 告

佐藤 衛君

会報到着一鶴岡西R.C、遊佐R.C

TAKE TIME TO SERVE

時間を捧げよう 奉仕のために

◆ スマイルボックス

川村徳男君 — 長女ご結婚

新穂光一郎君 — 長女恵さん鶴岡南高校入学

◆ 国際ロータリーより16mフィルム“平和のための財団”の到着

本日のロータリー財団の募金額 ¥ 11,270

◆ 野村敏行君退会の挨拶

この度、社の命により東京本社に転勤することになりました。53年4月に鶴岡に来まして2年9ヶ月の間、本当にアッと云う間のように思われます。その間皆様の温い友情の中で楽しく、有意義に過ごすことが出来ました。

私共転勤族は関東、関西、九州とそれぞれの土地、土地の変化を見る事が出来ませんが、何づれにも特色があります。しかしこの鶴岡には豊かな自然と人間味あふれる日本の伝統的良さがシットリと残っているように思われ、おそらく私の一生の中で深く印象に残る地になることだろうと思います。皆様の一層のご発展を心から祈り退会の挨拶とします。

◆ 会員スピーチ

253地区会報セミナーに出席して

石井敬三君

- ◇場 所 郡山ビューホテル
- ◇日 時 56年3月7日 12時～15時50分
- ◇講 師 田辺経営出版部長 林 健一氏
- ◇集 合 者 約 60名

(1) ロータリーとして会報のあり方

253地区の会報を全て通覧したが、これほど思うのは一つもなかった。何が悪いかというと、単なる記録が主であって読ませる努力がない。

会報発行の目的である

- ・組織の目的を実現する意志がはっきりしない
- ・自己啓発とリレーション機能が不足
- ・ロータリーのイメージアップの不足
- ・奉仕のあり方のグレードアップ

といったものが全て足りない。

- 出来るならば会員外にモニターを置いて部外者に批判してもらえばよい。
- (2) 一般的に会報として成功しているのは
 - ・教育啓蒙機能
 - ・イメージメント機能（娯楽）
 - ・情報公開の場
 - ・組織化（オーガニゼーション）を意識した会報作りになっている。
 - (3) 会報編集の具体的ノウハウ説明
 - (4) 文章の書き方の説明
 - (5) 253地区各クラブ会報の個々の批評と改正点を指摘等、3時間～4時間にわたる充実した講習会であった。

◆ 南洲翁遺訓について

菅 健 君

荘内と南洲翁とのつながりについてお話し申し上げます。幕末に荘内藩は幕府より江戸取締りの大役を引き受け有名な長州屋敷の接收、慶応3年12月25日に江戸薩摩屋敷の焼き討ちを敢行して鳥羽伏見の戦いの発火点となり戊辰戦争が開始されました。

荘内藩は秋田方面に出撃して政府軍に大打撃をあたえ国内には政府軍を一兵も入れなかった。したがって鶴岡城の落城にあたっては殿様も重役たちも荘内全員が政府軍の報復と敵罰を覚悟しておりましたが、結果は意外にも寛大そのものでありました。明治元年9月26日、政府軍参謀黒田清隆は致道館に入り、夜半16才の藩主酒井忠篤は礼服を付け単身黒田の前に謝罪しました。

黒田の示した降伏条件は藩主も重役も罰せず、藩主は当分謹慎、藩士は帯刀を許され自宅謹慎を命ぜられただけで、武器は大砲のみを接收し残りの銃器はそのまま重役お預けとして城中に置きました。のみならず薩軍の宿舎は木戸を閉し荘内藩士の市内通行は自由にして「降将を辱めず」という日本古来の武士の美德を守り抜きました。予想もつかなかった寛大な恩典に荘内人民全員が感激しました。

明治元年12月25日、会津若松へ国替え命令が出て荘内領は秋田佐竹公へ差し出すべく命ぜられました。12月の末、大殿様忠発公は菅実秀を召し出されてすぐ上京して国替え中止運動するよう命ぜられましたので実秀は明治2年1月4日雪深い鶴岡を出発し苦難の一步を踏み出しました。上京してすぐ黒田清隆に会い降服に対して寛大な処理をしてくれた事に感謝の意を表すと、黒田は正直に答えて「荘内藩の処理は私の発意ではなく、すべて西郷先生の指示に従っただけだ」と答えましたので実秀は「是非お会いしてお礼を申し上げたい」と言

った処、黒田は「西郷さんは東京には居ません、荘内のことは私にまかせて城の受け取りにも立ち会わずにまっすぐ鹿児島に帰りました。“おれの役目はすんだ、中央の政治は大久保どん、木戸さんにまかせておけばよい。俺は政治に不向きな男だ、衣冠束帯姿で廟堂に立って公卿さんや殿様相手に、もっともらしく論議するのは全く不得手だ。上にいる者が地位や恩賞を奪い合うのを見たくもない。兵はよくねぎらってもらいたい。そういう事は、大久保どんやお前がうまくやってくれるだろう」と言ってさっさと帰ってしまいました。」と黒田が言ったので、実秀は黒田の少こしも自分を飾ろうとしない真摯な人となるに感動したそうです。

又それほどに信頼を受けている西郷に対し測り知れない厚さと広さを改めて知ったと言います。そして荘内藩の将来を全面的に相談しようと決心したと言います。又阻止運動の方は薩摩に強い対抗意識を持つ長州人は薩摩に荘内が近づくことを嫉視し、その上長州の大村益次郎の荘内解体論がからんで陰に陽に荘内国替え阻止運動を妨害しましたので阻止運動が達成しそうに見えて幾度も覆えられました。

明治2年6月に到り政府は移封先を会津から盤城平に変更し、8月迄に移封完了すべしと指令して来ました。平は会津よりもひどく兵火に焼かれ悲惨な状況でしたので又、阻止運動を続けました。7月22日になって運動が功を奏して荘内復歸の命令が出ましたが、その代わりとして70万両の献金命令が出ました。それにも実秀は猛烈に反対しましたが、大隈重信との談合で承知させられましたが、その時から半分で切り捨てる作戦だったようです。

明治3年5月に到り「残金献納に及ばず」の命令が出て一段落をつけました。その後、黒田と実秀との計いで明治3年11月藩主忠篤公の謹墳が解けたのを機会に忠篤公を藩士20余名を付き添わせて鹿児島へ留学させました。その時公は18才で親しく西郷について教えを受け、大名気分を脱ぎ去り桐野、篠原、野津等について軍事教練を受け明治4年4月に帰りました。

それと同じゅうして西郷は4コ大隊をつれて御親兵として上京して来ました。その時、実秀は初めて西郷と会見しました。その時の様子を実秀の行状記の中で赤沢源也さんは次のように書いております。「一見果してこの人なりと交情日に厚く、菅氏の翁を時すること兄の如く、翁の菅氏を親しむこと弟の如し。ある時翁は『命もいらぬ、名もいらぬ、官位も爵位もいらぬ者ならでは共に廟堂に立ちて天下の大政を議し難し』と語られしを菅氏つくづく聞き給い『それはきっと行い得らるべし』と答え給いしかば翁うれしそうにうなずかれし」と言っております。

西郷と実秀との時々会見の場所は荘内藩御用商人深川の米問屋越後屋喜左工門の家が向島の越後屋の別宅でありました。

明治4年9月実秀は東京を出て荘内に帰ったのですが、その間西郷との会見は4ヶ月でした。その後、明治8年2月28日荘内を出て5月17日鹿児島へ着いて、6月12日鹿児島を出て荘内に帰りましたが、その間26日間、西郷より親しく教えを受けました。帰る2日前の6月10日に西郷は一日を荘内の人達のために書を揮毫してくれました。現在荘内にある書の大半はこの日のものです。約40枚を書き終えたのは午後3時を過ぎたそうです。この時に西郷は実秀に対して「自分はこのように人民を苦しめ道を失った今の政府と共にすることは出来ないがいずれ政府に出る時は必ずあろうからその時はきっとお知らせ申そう」と言ったと云います。

明治10年の西南の役の時政府は荘内は必ず立つと見て山形に2ヶ大隊 巡查300人、越後へ2ヶ大隊 巡查300人、小松の宮を総督として荘内を攻撃する計画でありました。

開墾士族もじっとしてはいず「荘内士族開墾始末という本によると」少壮の士は血湧き肉躍るの慨に堪えずして剣を磨き銃を撫して殺気紛々として機に至るを待つの氣勢なり」とありまして一触即発の事態でありましたが、実秀は静かな水のように殺気立った青年を抑えて動きませんでした。赤沢源也さんが「兵力をもって鹿児島を応援することが事実上不可能であれば、せめて政府に進言して西郷先生の恩誼にむくいたい」と実秀に迫りましたが実秀は烈しく一喝して「何んの益も無いことをしてただ申し訳立てるようなことは、わしはしない」と言ったといひます。

なぜ実秀が動かなかったかと言うと第一に、今日の鹿児島の子兵はいまだ真相が明らかではないが、もし西郷先生の真意から出たものであれば必ず自分に連絡が有る筈だ。しかるに一片の書信も無いことから言つて、これは決して先生の真意から出たものではない。情義のため鹿児島士族に一身を投げ出し正道を踏んでこれを天下に示そうとしたものであろう。いま荘内が自らの力を量らず暴挙を企てて犬死するのは決して西郷先生の真意に添わないこと。

第二にもし鹿児島に呼応して一たび起つならば荘内10万の人々を兵火に投ずる事になり、遠くドイツにある両殿様に対して取り返しのつかないご迷惑を及ぼすことになる。という事がありました。これが殺気紛々として剣を磨き銃を撫した少壮の士族を抑えた実秀の真意でした。

黒崎研堂さんが西南戦争を心配でたまらず実秀に聞くたびに実秀は「西郷先生のこのたびの挙兵は道を直して天下後世に示されたもので我々がここで死ぬことは決して先生の心に添うものではない。一人でも生き残つてこの道を明らかにして後世に伝えてこそ先生に地下でお目見えしたとき、よくぞ我が志を知ってくれたと喜ばれるであらう。我々はいよいよ道を学び先生の遺志を継ぐことに生命を捧げよう」と言ったといひます。これが西郷遺訓の生まれた基です。

本当に命がけで作ったものと言えます。又、西南の役へ参加した気持ちで作ったものと思います。

遺訓は明治22年、西郷の賊名が解かれ贈位の勅命があったとき西郷先生を真精神を今こそ世に明らかにすべき時であるとして実秀は赤沢源也さんを主筆として西郷先生に親しく学んだ庄内の人々の感銘の一語一語を集録編集させ、これを幾度びも校閲した上で完成したものです。

遺訓の根底は克己の学を堅忍力行されていることをお慕いする心が一語一語に流れております。

出 席 報 告

本日の出席	会 員 数	71名	欠 席 者	飯白君、今野君、板垣(広)君、風間君、黒谷君 諸橋君、斎藤(利)君、笹原君、佐藤(順)君、 新穂君、玉城君、丹下君、津田君、山口君
	出 席 数	57名		
	出 席 率	80.28%		
前回の出席	前回出席率	85.92%	メ ア ッ ク ブ	秋野君、森田君、諸橋君、佐藤(友)君、鈴木 (弥)君、鈴木(善)君一鶴岡西R.C
	修正出席数	67名		
	確定出席率	94.37%		